

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第43号

平成29年3月14日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

高山右近、国外追放直前に「日本訣別の書状」送る

帰ラシト思へハ兼テ梓弓 ナキ数ニイル名ヲノ留ル

— 書状本文中に、正行辞世の歌の引用 —

直筆書状残る本行寺／石川県七尾市

昨年暮れ、吉野如意輪寺の加島公信住職から「扇谷さん、高山右近が残した日本訣別の書に正行辞世の歌が引用されていることをご存知ですか。名だたる大名の一人、高山右近が江戸初期に正行辞世の歌を知っていたという事は、この頃、多くの人に正行の事績が伝わっていたという事を示す貴重な史料といえるのではないのでしょうか。」とお電話をいただきました。

平成28年1月30日付の毎日新聞石川県版朝刊紙面に「本行寺七尾参拝者続々」「ゆかりの高山右近『福者』に」「直筆書状やマリア像展示」の見出しのもと、国外追放を前に高山右近が残した書状（写真）が掲載されていた。

同紙は、以下伝えている。

— 高山右近は、加賀藩祖・前田利家の招きで、天正16年1588能登に移り、国外追放までの26年間、本行寺（七尾）に滞在した。本行寺は、能登に茶の湯を紹介したことで知られる茶人の円山梅雪が15世紀に開いたもの。

この本行寺に、追放直前に前田利家の正室・まつに宛てたとみられる直筆の書状「日本訣別の書」（写真 縦16.5センチ 横45センチ）が残る。追放を控えた心境

と感謝の思いがしたためられている。

前田利家の正室、まつに宛てた書状

◆書状の本文は以下の通り。

近日出舟仕候 仍此呈一軸進上候 誠誰ニカト存候志
耳 帰ラシト思へハ兼テ 梓弓ナキ数ニイル 名ヲノ留
ル 彼ハ向戦場命墮 名ヲ天下ニ挙是ハ 南海ニ趣命懸
天命ヲ 流如何六十年之 苦忍別申候此中之御 礼ハ
中々不申上候々々 恐惶敬白 南坊
九月十日 等伯（花押）

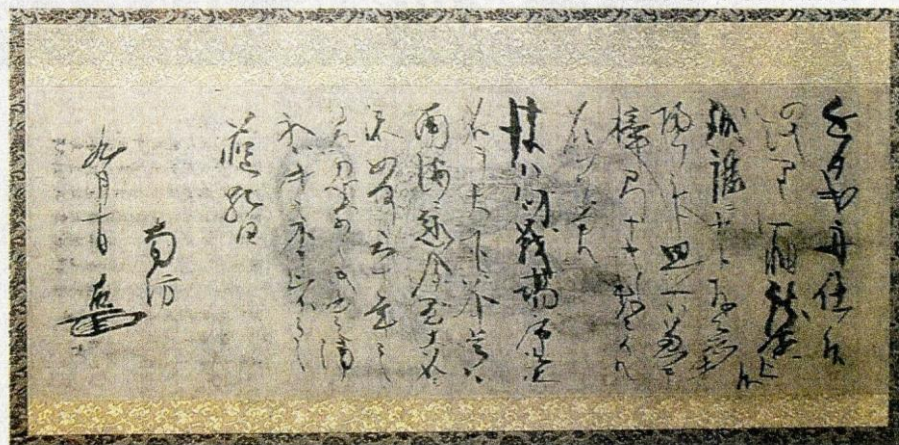
この訳文は、以下の通り。

近々出航いたすこととなりました。つきましては、この度一軸の掛物を差し上げます。どなたに差し上げようかと思案しましたが、私の志ばかりでございます。

帰らじと思へば兼ねて梓弓なき数に

いる名をぞとどむる 彼（正行公）は戦場に向かい、命を落して、天下に名を挙げました。是（私）は、今異国の南海に赴き、命を天に任せて、名を流すばかりです。人生60年来の苦もなんのその、いよいよ、お別れの時がやってまいりました。この間賜った心づくしのお礼は、

国外追放直前に右近が記した書状。冒頭は「近日出舟仕候」で始まる
＝いずれも七尾市小島町の本行寺で



筆舌に尽くすことはできません。怖れながら申し上げます。

九月十日

南坊等伯

右近は、何故正行辞世の歌を知っていたのか

太平記読みや楠兵法書が世に続々と出てくるのは1600年代の中ごろ。しかし、高山右近が生きたのは、1500年代中頃から1615年まで。楠公事績がまだ世に出る前の時代、何故、高山右近は四條畷の合戦に臨んだ正行の事績を知っていたのか。

秀吉のキリシタン弾圧を逃れて、高山右近は加賀前田家に客分として26年の長きにわたって流浪生活を送っている。このあたりにそのきっかけがあるのではないだろうか。

信長時代(1570年頃～1582)、キリシタン大名として、2万石から4万石になり、信長とは良好な関係が続き、秀吉時代には本能寺の変では山崎合戦で先陣をつとめ、4千石の加増を得る。

また秀吉を悩ませた根来衆、四国の長宗我部追討に参加、功をなし、明石6万石に移封されて大名として栄達の道を歩む。

しかしこの後、天下統一・中央集権を目指した秀吉との確執が始まり、キリシタンに理解を持っていた前田利家によって加賀に引き取られる。

高山右近は、初代利家、二代利長に仕えること26年。家康が江戸幕府を開き、中央集権体制確立に向けてキリシタン弾圧を強化、秀忠(実質は家康)の禁教令発令となるが、キリシタンの叛乱を恐れた家康は、右近に死を与えず、国外追放を言い渡す。

また、右近もキリシタンとして自らの命を絶つことは許されなかった。

加賀藩には太平記読みの流布が

高山右近は、幕府から追放の命を受け、加賀を急ぎよめることになるが、その時、前田利家の正妻、まつに宛てたとみられる書状をしたためる。そして、この書状の中で、吉野如意輪寺に残る正行辞世の歌が引用されているのである。

高山右近は、270年前の正行の事績を何故、知っていたのか。そして又、この事は、戦国末期から江戸初期にかけての頃の一人名が、正行の事績を知っているということであり、この頃広く天下に知れ渡っていたことを示す証左ではないか。

特に、加賀に滞在した高山右近が正行の事績を知ることとなった背景を繙いてみよう。

高山右近が預けの身として入った加賀、前田家には太平記読みの世界が色濃く浸透していたと思われる。太平記読みのバイブル書と言われる「太平記評判秘伝理尽鈔」は、17世紀中ごろの寛永から元禄にかけて出版され、飛躍的に広がったとされるが、慶長(1596～1615)から元

和(1615～1624)にかけて、既に流行し始めていたことが明らかになっている。

名和家伝来の「理尽鈔」を伝授されたといわれる大運院陽翁は、各地各大名に歴仕した後、その晩年は、三代前田利常の招聘を受けて加賀に入り、この地で没している。

江戸徳川家と太いパイプを築いていた前田

家では、太平記読みの流行を受け入れる十分な素地が備わっており、利家、利長の時代に、大運院陽翁を招聘する下地が出来上がっていたものと思われる。

だとすれば、高山右近の過ごした26年間に、楠流兵法の秘伝書としての側面を色濃く持っていた太平記読みの世界、すなわち正成、正行の事績を知ることとなったこともうなづける。

しかし一方、太平記読みを通じて史料に残る正成の事績は多くあり、知りえても、正行の事績までうかがい知ることが難しかったのではないか。とすれば、こういった太平記読みの世界以外のルートによっても、楠公の事績が広く流布していたことも考えられる。

正行の事績は広く知れ渡っていた？

いずれにしても、高山右近が日本を去るにあたって、後世に思いを伝えるために、正行の辞世の歌が引用されていることに驚くほかない。

そして、史料の少ない正行にとって、この発見は大変貴重な発見といえる。

正行は死を覚悟して吉野を落ち、その思いのままにその名を後世に残すこととなったが、右近は、正行同様に国や民を思いながら日本を去るにあたって、自らの命を自らの手で生かすことも殺すこともできず、運を天に任せてその名を流すしかなかった。右近の生涯に痛恨の念を禁じ得ない。

一口メモ 高山右近と四條畷の関わり

高山右近と四條畷のかかわりにおいて触れておきたい。天正11年1583、秀吉が大坂城を築城するが、この地に大坂協会の建設を提案したのが高山右近といわれる。

高山右近は、当時、五畿内で最も美しいと謳われた四條畷岡山教会を、結城氏の三箇移封に合わせ、大坂城への移転を提案している。

そして、自らが岡山教会の移転事業に専念し、同年、大坂協会で最初のミサが開かれている。

責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭



高山右近像(高根市民会館前) 西森正昭 1972年作
(同一のものが1977年マニラ・ディオ広場に建立された)